

回顧 初めての神戸への旅

平成7年（1995年）1月17日未明に関西地方を中心とした大地震が発生した。テレビ・ラジオ、新聞等の報道内容から察すると、途轍もない大惨事が起きたというのが率直な印象だった。

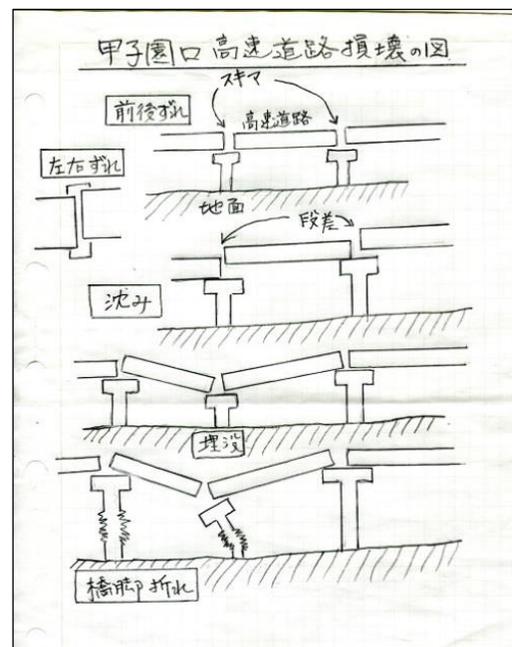
我が社の関西地区のユーザーでもコンピュータが倒れたり、電源等の設備の故障により動けない情報システムが発生した。これらの中には、国民の暮らしの基盤となっている情報システムも多数あり、復旧が急がれるものが多かった。

ユーザーの被害もさることながら、当社の社員にも被害は及んでいた。自宅がダメージを受けた者から交通機関が停止したままで通勤が出来ない者まで様々な被害が「カスタマーサービス」という任務の上に覆い被さってきた。

緊急事態への対処策として、「関西支社への人的な支援」が決まり、私もその一員として出張することになった。

背広にYシャツの普段の服装ではあるが、現地の状況を想定し軽登山靴で出かけることにした。荷物の中には小型ザック・軍手・カイロ・帽子なども入っており、通常の出張とは少々異なる荷物になった。新幹線が動き始めたことで人の移動が可能になったことを機に、1月21日の朝、大阪へ向かった。

車窓から見える景色で少しずつ「被災地」のイメージが見えてきたが、実際に大阪の街へ出てみると、潰れた建物、沈んだビルや傾いたビルなどはまだしも、橋脚が沈んだり折れたり傾いたりしたことで倒壊してしまった高速道路は衝撃的だった。（右図：スケッチしたもの）



徐々に通常のカスタマーサービス体制が取り戻せるようになった頃を見計らって、1月29日に9日間の出張を終って帰京することになった。

仕事としての旅はここで終りになるのだが、もうひとつしなければならないことがあった。

昭和40年代から50年代にかけて一緒に仕事をした仲間のK君は早期に退職して神戸に住んでいる。

震災後何度か連絡を試みたが連絡がとれない。無事なのだろうか、それとも……。

出張の任務を終えたところで、K君の消息を尋ねる半日の私的な旅を付け加えることにした。

新幹線は復旧したものの、JRの在来線や私鉄の復旧にはまだほど遠く、大阪から神戸へ行くのはさほど簡単なことではなかった。出張中の業務として一度神戸方面へ調査に出向いていたので、代替ルートを予め認識できていたのは好都合だった。

まずは、何を土産に持参すべきか？ と言っても梅田の地下街を歩いたところで、買物が出来るほどには店は開いていない。飛び込んだ一軒の店で、菓子パンやお菓子（しか残っていなかった）をたっぷり買い込んで、福知山線に飛び乗った。

三田（さんだ）で乗り換えて、神戸電鉄三田線・神戸市営鉄道北神線経由で新神戸に向かう。大阪から神戸まではJR・私鉄各社の様々な路線が走っており、通常ならば30分もあればたどり着ける。

地震の被害で動けなくなった鉄道網の中で、この経路で六甲山の北側を大きく廻ってからトンネルを抜けて新幹線の神戸駅へ出るのが、大阪から神戸へ向かう唯一の方法だった。

未だダイヤ通りに運行できていない鉄道で、途中の乗換えの待ち時間も含めると新神戸まで2時間以上かかったように覚えている。新神戸に着いても、その先の鉄道はまだ走っていない。

地図を片手に海拔44mの新神戸駅から三宮駅（海拔13m）まで一直線の下り道。閑散とした三宮駅から山手通りを抜けて県庁の脇を南西へ南西へ。すっかり潰れて平らになってしまった家、軒先が崩れ落ちたビル、傾いたままの建物……。残酷な被災地の光景や途方に暮れた住民の顔を見ながら歩くのは快適でないのを通り越して苦痛にさえ感じてくる。

湊川公園を過ぎると景色は一変した。松本通の商店街や家並みは地震の直後の火災もあり、一面の廃墟と化していた。残っているのは燃えかすと瓦礫だけで、燻りの臭いがまだ残る細道に並ぶ「人々の思い出の残る残骸」が何とも痛々しい。そればかりか、瓦礫を片付ける人、茫然と立ち尽くすばかりの人などなど、映画でしか見たことのないような光景が、次から次へと目に入ってくる。



（右写真：松本通・・・大木本美通氏撮影の震災記録写真より借用）

松本通の南側をさらに進むと、旧山陽道（国道28号）の広い交差点が陥没して穴があいている。神戸高速線（地下鉄）の大開（だいかい）駅の上の道路が陥没したとのこと。満員の通勤客を乗せている時間帯に起きたとしたら・・・と想像してみると背筋がヒヤリとしてくる。

海拔3.6mの大開駅から北西に向かって行くと、街角一本を過ぎる度に高度が増して会下山（えげやま）への上りに入る。目指すK君の家は山の南の中腹、海拔50mほどの所にあるはず。この山の膨らみの最高地点は80mを越える。海を見下ろす絶景の所に住んでいたんだなと思いを巡らす。

目指す住宅街には人気はなく、壊れた家や壊れかかった家があるだけの奇妙な静寂の町になっていた。通りがかった主婦らしき人に尋ねてみたら、神戸学院女子高校が避難場所になっていると教えてくれた。（この学校は2014年にポートアイランドに移転して今はない）

神戸学院女子高校の避難所を訪れて、K君の住所を示して尋ねてみたら、この方の居住地からするともう一つの避難所になるはずだと教えてくれた。

もうひとつの避難場所は会下山の南西端にある神港高等学校（現在は神港橘高校）だった。

恐る恐る体育館の入口に踏み込み、通りがかった女子高校生に問いかけてみたら、奥の方へ探しに行ってくれた。体育館の壁には、模造紙に書かれた避難所の組織体制図が貼ってあり、K君は主要な役割を担っているようだった。体育館の中には避難してきた近隣の住民がひしめきあっており、語り合いのざわつきと共に、人々の呼吸が独特の温もりと湿度と香りを漂わせていた。

女子高校生に伴われて出てきたK君は、薄汚れたマスクが疲れを示しているようだったが、元気な顔と声だった。これしか支援する物資が手に入らなかったと弁解しながら手土産の菓子パンを渡して、しばらく立ち話をした。

あの日、早朝に尿意を催して二階の寝床から出て一階の便所に入った。用が済んだ頃にドカンと来た。便所から出ようと思ったが扉が開かない。不安と焦りの中で格闘の末、辛うじて脱出したK君の目の前に広がったのは「落ちてきた二階」だったと言う。「畳半畳の個室（便所）」に閉じ込められていたために命を失わずに済んだと語る表情を今までも忘れない。

無事ではないが生きていたことがわかって、「ここまで来てみてよかった」の思いを強くした。

私との立ち話の間にも、何人もの女子高生達が業務上の連絡や相談をK君に投げかけてくる。長居しては迷惑になりそうだと判断し、この場を辞することにした。

迫り来る夕間に負けまいと急ぎ足で往路を戻ったが、新神戸駅に着いた時はもう1月の冷たい空気が支配する暗闇になっていた。

新幹線に乗って帰宅の途につくとにわか疲労感が押し寄せてきて、しばらく車窓を眺めているうちに深い眠りに入ってしまった。

帰宅後に地図を開いて測って見たら、新神戸から会下山までの往復は概ね 15K m の道程だったようだ。軽登山靴を履いてきたからできたことだったのかもしれない。

そして・・・、帰宅の二日後には咳と喉の痛み、翌日から熱も出て数日寝込むことになった。9 日間の緊張と疲労の中の仕事に加えて、最終日の個人的な重労働で体が悲鳴を上げたようだ。

というような次第で、毎年 1 月 17 日前後になるとどうしてもこの日のことを思い出す。

被災した街の景色や人の姿を自分の目で直接見て来たことで、少しばかりではあるが阪神大震災を自分の言葉で語れるような気がした。

神戸の町は再び賑わいを取り戻したように見えるが、一人一人の人々の頭の中には、様々な「その人なりの忘れられぬ記憶」が今も息づいているのに違いない。

折りあたかもこの頁を書き終えた日に、2023 年歌会始の御題「友」が発表された。

かわやからでられずいのちたすかりし ともをおもうひ 1.17

以上

<注釈・補完情報>

会下山（えげやま）＝仏教用語で「会堂や師匠の常在する修行の場」を意味する地名。

古墳や遺跡が数多く発掘されており、雄伴（おとも）の郡の司をしていた北風氏の先祖がここに居を構えていたと言われている。

鎌倉幕府を倒した後醍醐天皇が建武三年（1365 年）に、謀反を起こした足利尊氏と戦った湊川の戦で、楠木正成がこの山に本陣を置いて戦った。

山全体が公園になっていて、周辺の住居区は神戸市と住民との間で交わされた町づくりの協定等に守られていて、一定の条件を越える建造物や催し物は許されていない。これにより環境保全や乱開発の防止などができている町になっている。

湊川（みなとがわ）＝会下山の北部から山の東側を流れてくる湊川は度々氾濫し、神戸の港に土砂を大量に送り込んでいた。会下山の北東にある「荒田」という地名がそれを物語っている。現在は、会下山の西端に水路トンネルを開削して、山の約 2Km 西側に流路をとり大阪湾に落ちている。

そんなわけで湊川の戦で有名な湊川神社の側には、今では湊川は流れていない。